

春まき夏秋どりネギのは種期と育苗法

佐々木 裕二・阿部 隆

(岩手県園芸試験場)

Seeding Date and Nursery System of Spring Seeding-Japanese

Bunching Onion for Summer and Autumn Products

Yuuji SASAKI and Takashi ABE

(Iwate Horticultural Experiment Station)

追肥 $N-1.5 \text{ P}_2\text{O}_5-0.4 \text{ K}_2\text{O}-1.5$

1 はじめに

夏秋どりネギは夏場の高温期を経過する栽培となるため品質が低下しやすく作柄も不安定であるなどの栽培上の問題がある。一方この時期は生産量が少なく販売面では比較的安定していることもあり、今後、本県の夏期冷涼な立地特性を活かせる有望品目として生産拡大を図りたい。本作型は耐暑性の強い品種の使用が栽培の前提となるが、これら品種はこれまでの秋まき露地育苗では苗の越冬率が低いことや気象条件によっては苗質が劣るなどの問題がある。そこで今回、8・9月どりをねらいとした春まき夏秋どりネギの作型開発と育苗法についての検討を行った。

2 試験方法

(1) 供試条件

1) は種期 (定植期)

- 2月20日 (5月31日)
- 3月1日 (6月11日)
- 3月15日 (6月18日)

2) 育苗方法

- 二重被覆区: 天井換気型フィルム+シルバーポリウ (夜間)
- 二重+べたがけ区: a+通気性被覆資材を発芽時までべたがけ
- 三重+べたがけ区: b+通気性被覆資材を内部トンネル

注) 無加温ハウス内にトンネル状に各処理区を設置した。

3) 苗質

- 大苗 (葉鞘径0.7~0.9cm)
- 中苗 (葉鞘径0.5~0.7cm)

(3) 耕種概要

- 育苗方法・苗質試験のは種期 (定植期) 3月1日 (6月1日)

2) 供試品種 吉蔵

3) 栽植様式 うね幅90cm 株間4cm (2,777株/a)

4) 施肥量 (kg/a)

育苗床 $N-0.85 \text{ P}_2\text{O}_5-0.85 \text{ K}_2\text{O}-0.68$

本畑基肥 $N-0.8 \text{ P}_2\text{O}_5-0.8 \text{ K}_2\text{O}-0.8$

3 試験結果及び考察

(1) は種期

本試験では8~9月に収穫することを目的として、2月下旬~3月中旬には種期を設定した。は種期の違いによる収量と規格別割合の差異を表1に示した。は種期の最も早い2月20日まき区は育苗日数100日、本畑の生育日数103日で収穫期が9月11日となった。3月1日まき区は育苗日数102日、本畑の生育日数101日で9月20日の収穫となった。は種期の最も遅い3月15日は種は育苗日数が最も短く95日また本畑の生育日数100日で9月26日収穫となった。このように、は種期が変わることにより、育苗日数に多少の差がみられたものの、本畑での生育日数は100日程度を要することが判明した。a当たり収量は2月20日まき区が460kgと最も高く、3月15日まき区の400kgがこれに次いだ。3月1日まき区は350kgと最も低く、は種期の違いによる収量差には一定の傾向が認められなかった。このうち、2月20日は種では、葉鞘径が1.2~1.8cm中心の収穫・出荷をねらえば8月下旬からの収穫が可能であった。また、各は種期における収穫物の軟白部のしまり・食味が良好で、さび病・黒斑病等病害の発生も少なかった。

表1 は種期の違いによる収量と規格別割合

は種期	軟白部(cm)		調整重 (g)	a収量 (kg)	規格別割合				
	長さ	径			3L	2L	L	M	S
2/20	33.8	1.75	167.2	464.3	0	35	40	25	0
3/1	32.0	1.66	127.6	354.3	0	20	52	28	0
3/15	34.9	1.93	145.1	402.9	8	47	37	8	0

(出荷規格) 2L: 葉鞘径1.9~2.4cm L: 1.6~1.8cm M: 1.2~1.5cm
S: 0.8~1.1cm

(2) 育苗法

育苗期が2月~3月と低温期にあたるためハウス内でのトンネル保温法について検討した。育苗法の違いによる発芽勢・発芽率の差異と葉鞘径別苗本数割合の差異を表2に示した。は種後12日目の発芽率では、二重被覆区が12%であったのに対し、二重被覆+べたがけ区で53%、三重被覆+べたがけ区で65%とべたがけをすることにより、発芽勢

が高められた。また、定植時の苗を葉鞘径の太さ別に分けたところ、葉鞘径が0.5cm以上の苗本数が二重被覆区で約50%、二重被覆+べたがけ区と三重被覆+べたがけ区が約90%とべたがけをした区が大幅に上回った。このことは、べたがけ区では地温が14~16℃の間ではほぼ一定であり、土壌水分も高く保持されたためと考えられる。

また各区から得られた苗の収量・規格別割合を表3に示

表2 育苗法の違いによる発芽勢・発芽率及び葉鞘径別苗本数割合

保 温 法	発芽勢 (%)	発芽率 (%)	葉 鞘 径 (cm)		
			0.7~0.9 (%)	0.5~0.7 (%)	0.5以下 (%)
a 二重被覆区	0	12.0	18.2	32.0	49.8
b 二重+べた区	4.3	53.2	20.1	67.4	12.5
c 三重+べた区	3.3	65.6	30.4	60.8	8.8

した。このうち二重被覆+べたがけ区から得られた大苗の収量が450kgと最も高く、三重+べたがけ区が416kgとこれに次いだ。二重被覆区は390kgと最も低かった。各区で大苗と中苗の比較をしたところ、いずれも大苗が優り、二重被覆区及び三重被覆+べたがけ区ではa当たり収量で約10kg程度の差がみられ二重被覆+べたがけ区では30kg程度の収量差がみられた。

表3 保温法及び苗質の違いによる収量・規格別割合

育苗の保温法	苗 質		調整重 (kg)	a収量 (kg)	規格別割合			
	葉数	葉鞘径			2L	L	M	S
a 二重被覆区	3.7	0.70	140.0	388.8	11	57	29	4
	3.3	0.64	137.2	381.0	13	67	13	8
b 二重べた区	3.7	0.70	162.1	450.2	24	68	8	0
	3.3	0.62	152.4	423.2	16	69	15	0
c 三重べた区	3.5	0.73	150.0	416.6	12	68	20	0
	3.4	0.65	148.5	412.4	14	67	19	0

注 各区とも上段が大苗、下段が中苗の数値を示す。

4 ま と め

(1) 9月どりのは種期

1) 2月下旬~3月中旬は種で、育苗日数95日~100日程度で定植苗齢に達し、本畑の生育日数が約100日で収穫ができた。その場合の収穫期は9月上旬~下旬であった。

(2) 育苗法

1) トンネルを併用したハウス育苗で、発芽時までトンネル内に通気性被覆資材のべたがけをすることにより、発芽勢を大幅に高められ、苗の揃い・苗質が向上した。

2) 定植苗は葉鞘径が0.5~0.9cm、葉数3~4枚程度の苗を用いることでa当たり400kg以上の収量が確保された。